



Vol.77

机の上の小さな変革

petit revolution on the desk



接点の作用

こんにちは、菅俊一です。今回は、身体とモノの間にある「接点」を変えてみると、何が起こるのか試してみたいと思います。

私たちは日々モノを扱う際に、身体とさまざまな接点を持っているわけですが、その接点を1つだけに絞り込んでしまうことで何が起こるのかを見てみましょう。

早速ですが、コップになみなみと水を注いだ状態で「1点だけ身体がモノに触れてよい」というルールを守って、コップのなかに入っている水を飲んでみてください。なお、接点の範囲は自由です。

いかがですか？ おそらく、最初は水をこぼさないようにコップは動かさず、口だけを近づけていき、コップのフチからすすむようにゆっくりと水を飲んだのではないのでしょうか。

人によっては、指1本で慎重にコップを少しずつ動かすことで口を近づけやすくした人もいるかもしれません。指とコップのわずかな接点から、どのくらい力を入れて押すとうまくコップを動かせるのか、接点と力の入れ具合に敏感になっていくのではないかと思います。

さらにそのまま飲んでいくと、おそらく水位が下がって唇が水に届かなくなり、すすんで飲めなくなってしまうはず。こうなると諦めてしまう人もいるかもしれませんが、たとえばストローを使って、唇だけでくわえた状態を維持できれば、そのまま最後まで水を飲み切る

ことができるかもしれません。

このとき、身体との接点の関係からストローという道具を見てみると、口から離れた水面に間接的にアクセスして、水を飲むためのモノだということがわかります。

接点が変われば身体とモノの関係も変わる

さて、今回試していただいたように「接点を1つに絞る」という制限のなかで日常の動作を行なってみると、当然、「いつもとは異なる方法」を模索する必要が出てきます。

また、今回のような「水を飲む」という行為ではハッキリと実感できますが、飲むたびに水位が下がっていくため、その都度変わる身体とモノの関係に対応し続ける必要があったのではないのでしょうか。

普段の私たちの生活のなかでは、このように刻々と変化する状況に対応を強いられる場面は多くあり、その都度、私たちは無意識に身体をうまく使うことで調整しています。また、身体と対象物だけでは対応できなかったとしても、ストローのような道具を間に挟んで使うことでうまくいく場合もあります。

接点という視点で改めて行為を捉えてみることで、身体の可能性や道具の役割について確認し直すことができるのです。

PROFILE 菅俊一〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』『ルール？本』など。